

2 人体への影響

A 急性期死亡・急性障害

急性期死亡は1945(昭和20)年12月までとされ、この時期に高率な死亡が生じた。原爆投下後初めの2週間に88.7%、第3～8週までに11.3%の急性期死亡がみられた。2,500家屋(被爆者数7,600人)の調査から、LD₅₀の放射線量は骨髓線量として2.7～3.1Gyと推定された。また、広島、長崎の急性期死亡者数はそれぞれ11.4万人、7.3万人前後と推定されている。

急性障害は3期に分けられる。第1期(原爆投下直後～第2週の終わり)には、即死ないしは数日の間に発熱、吐血、下血等を起こし、全身衰弱により死亡した。第2期前半期(第3～5週)の主要な症状は、脱毛、紫斑を含む出血、口腔咽頭部病変および白血球減少であり、放射線量が増大するほど顕著であった。第2期後半期(第6～8週の終わり)には、炎症症状の消退、出血性素因の消失がみられたが、一部には肺炎、重症大腸炎などで再び悪化するものもみられた。第3期(第3～4月の終わり)には外傷、熱傷、放射線による血液・内臓の機能障害も回復傾向を示した。

表1 広島の死傷者数(軍関係を含まず。1946年8月10日時点)

爆心地からの距離(km)	死亡者	重傷者	軽傷者	行方不明者	無傷者	合計
0.5未満	19,329	478	338	593	924	21,662
0.5～1.0	42,271	3,046	1,919	1,366	4,434	53,036
1.0～1.5	37,689	7,732	9,522	1,188	9,140	65,271
1.5～2.0	13,422	7,627	11,516	227	11,698	44,490
2.0～2.5	4,513	7,830	14,149	98	26,096	52,686
2.5～3.0	1,139	2,923	6,795	32	19,907	30,796
3.0～3.5	117	474	1,934	2	10,250	12,777
3.5～4.0	100	295	1,768	3	13,513	15,679
4.0～4.5	8	64	373		4,260	4,705
4.5～5.0	31	36	156	1	6,593	6,817
5.0以上	42	19	136	167	11,798	12,162
合計	118,661	30,524	48,606	3,677	118,613	320,081

(1961, 広島市)

表2 長崎の原爆死傷者数(長崎市発表)

死亡者	73,884
負傷者	76,796
一般被災者	120,820
計	271,500

軍関係者その他国民義勇隊などの流動人口が含まれているか否か不明。
(1979, 広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会)